

鴻巣西中通信

学 校 だ よ り

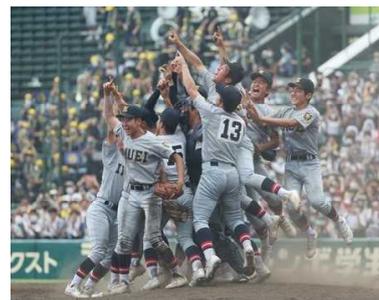
鴻巣市立鴻巣西中学校
鴻巣市大間1161番地
令和4年9月1日

第5号

「これが本当の決勝戦だと唸る甲子園」 ～指導者と球児たちが示した大切なもの～

校 長 服部幸司

先週8月22日、第104回全国高校野球選手権大会は、甲子園球場に31,200人を集めて決勝が行われ、仙台育英（宮城）が下関国際（山口）に8-1で勝って初優勝しました。東北勢が甲子園大会で頂点に立ったのは春の選抜大会を含めて史上初。決勝進出までは過去13回あったけれども、その度ごとに跳ね返されてきたことを考えると、東北の方々にとっては、正に「悲願」であったことが分かります。



仙台育英優勝「部員82名、全ての選手に『成長』と『出場』の機会を。」
—須江監督—

仙台育英（宮城）の「悲願」成就、そして、山口県勢64年ぶりの決勝進出を果たした下関国際。私は、そこには、生まれ持った才能だけではなく、厳しい練習を通して培った「信頼」と「心の軸」、「感謝」があったように思っています。



草むしりから始めた
坂原監督（下関国際）

「信頼」とは、生徒（選手）同士の信頼はもちろん、指導者が生徒を信じる気持ち、生徒が指導者を尊敬する気持ちです。下関国際の坂原秀尚監督、「弱者が強者に勝つ」精神を貫き、居眠りなど授業を疎かにする部員は練習に参加させない方針。学校内での授業は他の生徒の模範となるように全力で受け、一つ一つ目の前のやるべきことに取り組む。生徒一人一人が坂原先生を心から尊敬し、師として敬う気持ちが、特にピンチの場面、指示を仰ぐ場面の力強い、自信にあふれた「眼差し」に現れていました。

「心の軸」は、当たり前のことを徹底的に行うことで身に付きます。「勝つために磨く、心を磨く」、9年前の夏、仙台育英高校野球部グラウンドを野球部保護者として訪れた時、そのトイレに貼られていた言葉です。埼玉の名も知られていない高校との練習試合にも佐々木順一朗監督（須江監督の前任。2018年3月、野球部員の飲酒・喫煙の責任をとって退職。）は、最初から最後までベンチから指揮。試合後も、自らの言葉で30分以上も相手校のよさと課題を挙げてくださいました。帰り際、仙台育英野球部員全員の見送る「礼」は、ピカピカのトイレに生徒の力強い文字で書かれた「貼り紙」とともに、強烈な思い出です。

両校の生徒が、インタビューで口にしていた言葉があります。「先輩たちがここまでつくってくれたものがあるからこそ、今の私たちがいます。」という「感謝」の言葉です。逆に観客席に応援に来ていた下関国際野球部の先輩は、「今の下関国際には僕たちの時代にはなかったものがあります。それは、ピンチの時に相手に向かっていく気持ちです。」と後輩を称えるのです。王者「大阪桐蔭」を接戦の末、破った理由の1つを理解できます。

教師と生徒との「信頼」、日々の鍛錬からもつ「心の軸」、おかげさまの心「感謝」、新型コロナウイルスに翻弄され続けた高校生活を制した指導者と球児たちが、これからの学校教育、いや「社会」に大切なものを示している気がしてなりません。